

ある年の文藝春秋のなかに、歌手の今井美樹さんと柳田邦男さんの著書『犠牲』との出会いについて記された記事がありました。『犠牲』は、自らの人生に終止符を打った、柳田さんのご子息の言葉が綴られたものです。他者には決して分からない孤独への絶対的な恐怖、しかしそれを身を切って理解しようとする父親の姿…それらが精神的どん底にあった今井さんの心を打ち、「もしかすると自分の歌に光を見つけてくれる人がいるかもしれない」と歩み出す勇気を与えたのだといいます。柳田さんは、このことについて「自死を選んでしまった若者の記録であるにもかかわらず、命をかけて生の意味を問いつけた言葉であったがゆえに、自分の存在意義を見失いかけていた苦悩する一人の女性の心に激しく響くものがあったのであろう。自らは死に向かいながらも、その状況のなかでこそ見出した言葉には、他者をして、生に向かわせる力が秘められているのかもしれない。」と語っておられます。これは、柳田さんからすれば「言葉が用いられる」体験であったとも言えるでしょう。

本日の箇所には、イエス亡き後、弟子たちが聖霊に満たされて、「ほかの国々の言葉」で「神の偉大な業」を語り始めたことが記されています。奇妙に思えますが、教会はこの箇所を読むごとにあることを確認してきました。それは、「突然」とか「天から」とか「聖霊」といったキーワードからも分かるように、「人間によって、教会が始まったのでも、宣教が押し進められたのでもない」ということ、そしてその担い手は、あくまでも私たちを通して働かれる神（聖霊）であるということです。それは見方を変えれば、神は救いを実現されるために、私たち一人ひとりを用いられるということです。だからこそ霊は「一人一人の上に」とどまり、それぞれに「ほかの国々の言葉」を割り当て、託していくのです。

立派で整った言葉を持っているかどうかは問題なのではありません。今井美樹さんは、柳田さんとご子息の言葉に込められた思いをこそ聞き取り、そこに救われたのです。むしろ、沈黙のなかでさえ、思いが見えない言葉となって相手に届けられることもあるでしょう。それに、弟子たちから発せられた言葉は、イエスを裏切ってしまったあの十字架での体験が元になっています。しかし、その傷の体験を抱え持つ一人ひとりの言葉をこそ用いて誰かを救い出す神の業を使徒言行録は描くのです。

「あの人には、あなたの言葉が必要です」、そんな主の招きのなかで、私たちは用いられ、つなげられています。

(文責：望月達朗牧師)

